

2006 年度静岡県自然学習資料保存事業中間報告

横山 謙二

本年度の静岡県自然学習資料保存事業については、昨年度から継続して作業をしている湯浅氏植物標本の整理作業のほか、昆虫標本、岩石・鉱物標本などの受け入れ作業を行っています。

湯浅氏植物標本は、前号でご紹介しましたが、65,000 標本のうち 5,600 標本のデータ入力が終了しました。ただし、これらについてはデータの並べ替えや確認作業を行う必要があります。また、新たに収集した標本が加わったため、過酷な作業がまだまだ続きそうです。

昆虫標本については昨年度ご紹介した標本のほか、稲葉 茂氏コレクション (5,385 点)、小松庄次郎氏コレクション (約 660 点)、杉山 恵一氏コレクション (約 10,000 点) が新たに搬入されました。また、平井克男氏コレクション (約 3,000 点) 高橋真弓氏コレクション (約 600 点) が追加搬入されました。現在、事業室では、これらの新たに加わった標本の整理・受け入れ作業を行っています。

化石・鉱物・岩石標本については、昨年度までに搬入された、池谷仙之氏化石コレクション (499 標本)、静岡県地学会コレクション (1,389 標本)、鮫島輝彦氏岩石・鉱物コレクション (2,686 標本)、寺田昭氏鉱物コレクション (112 標本) の受け入れ作業が終了しており、今後仮評価を行う予定です。長沢敬之助氏岩石・鉱物



湯浅植物標本とその整理のようす

標本 (約 1,500 標本) については、現在整理作業中です。これらの作業のほか、小川賢之輔氏の寄贈図書の整理作業などを今後行っていきます。

今後の標本搬入予定の標本としては、土 隆一氏化石コレクション (約 1,000 標本)、大橋昭彦氏鉱物・岩石コレクション (2,170 標本 4,400 点)、志村義雄氏植物コレクション (5,000 点)、杉野孝雄氏植物コレクション (30,000 点) などがあります。これらの標本が搬入されると、現在の標本室は、ほぼ標本で埋め尽くされることとなります。



2 階の昆虫標本の整理棚



1 階の化石・岩石の収蔵室と小川氏の図書資料

豊橋市自然史博物館見学の報告

及川 忠広

平成 18 年 10 月 1 日、豊橋市自然史博物館の見学会を行いました。当博物館は、動物園・植物園・遊園地と同じ敷地の中にあり、全体として豊橋総合動植物公園を形成しています。当日は雨足も強い悪天候でしたが、親子連れの来園者の姿も多数見られ、市民公園として有効に活用されていることがうかがえました。

博物館の外には、実物大の恐竜模型が設置されています。老朽にもなう補修の際には、新規に「復元想像図」を一般から募り、その塗装を行うというイベントも実施されたそうです。市民参加の楽しい催しと思われます。

豊橋市は、昭和 58 年にアメリカのデンバー博物館と友好提携を結び、アナトサウルスの骨格化石を購入。恐竜展示を手始めとした豊橋市自然史博物館を昭和 63 年に開館したとのこと。その後、名古屋大学名誉教授でもいらした糸魚川淳二先生の提言もあり、現在は地球生成から生命史全体の総合的分野、愛知県のみならず、東海地域全体の郷土自然についても資料収集 研究活動を行っているそうです。

研究テーマの広範囲化、資料の追加収集と、オープンしてからのちのリニューアルが幾たびも行われているため、展示内容とバックヤード施設も追加、追加で増設された経緯があったとのこと。

館内の構成は、以下のようになっていました。

- ・化石を含んだ岩盤が壁を飾るイントロホール。
- ・ティラノサウルスとトリケラトプスの骨格が展示されたオリエンテーションホール。
- ・アノマロカリスが泳ぐ情景模型もあり、バージェス動物群なども紹介する古生代展示室。
- ・アロサウルス、ステゴサウルス、アンモナイトなどが展示された中生代展示室。
- ・レプリカではない実物化石標本をである、アナトサウルス展示室。
- ・ナウマンゾウなどが登場する新生代展示室。
- ・ダーウィンの探検と進化論などを紹介するガラパゴス物語展示室。
- ・豊橋市周辺の環境を情景展示などもまじえて

紹介する郷土の自然展示室。

- ・化石のできかたを解説する、化石を知るコーナー。

デンバー博物館と提携していることもあり、恐竜の骨格標本が多いことには驚かされます。その一方、スポット的に展示ケースを設置し、最新的话题を提供することも忘れていません。動物園の方で、オーストラリア展示が新設されたことをうけて、館内ではカモノハシの骨格標本と、色鮮やかなオーストラリアの甲虫を展示していました。

中庭の植木にもテーマが盛り込まれてありました。中生代の森、ということで、トクサ、ソテツ、メタセコイヤ、イチヨウ、シダなどが植えられていました。池谷先生も感心され、「ただ緑化で植木するよりもテーマ性があって面白い」とおっしゃっていました。

地球生成を物語る岩石の展示には、音声アナウンスの仕組みが設置されています。来館者が標本に触れると、センサーが察知し、音声で解説を行うというシステムのようでした。

新設されたばかりだという古生代展示室は、なかなかユニークな展示手法が用いられていました。

天井から下がった垂れ幕には年代や生き物の見出しが描かれ、柱にはより正確なタイムスケールが表示されています。

また、古生代に発生した棘皮動物、貝、魚類などの紹介については、子どもと大人の身長差と視界の高さの違いを利用した年齢別の展示解説が設置してありました。子ども向けの展示としては、復元イラストと模型、四コママンガによる解説、ハンズ・オンの模式的な解説などがありますが、それらは床面に近い低い位置に設けてあります。一方、大人の身長の見界では、天井に近い位置には解説している生物の分類や進化を示す系統図、その下には化石と一般向け解説とがあります。動物園、遊園地と併設したかたちであり、もともと子どもたちの来館も多いことから、このように子ども向け展示について趣向を凝らしたのではないかと想像で



新しい古生代の展示室



子どもの視線に配慮した展示



温度と湿気を保つため内壁が木の板の収蔵室



魚の液浸標本の収蔵室

きますが、これからの博物館展示を考えた場合、子どもたちへのアピールは研究課題となるかもしれません。

ジオラマ……情景展示についても面白いものがありました。中生代展示室では、アンモナイトを狙い、魚竜 首長竜が泳ぐ様子を水中での視野で再現しています。新生代展示室では、ナウマンゾウを狙った狩猟の場面が模型で再現されています。

また、新生代展示室では、ナウマンゾウ、マチカネワニ、三ヶ日人など、静岡ゆかりの標本も見られました。東海の自然として豊橋自然史博物館も注目している資料が、静岡県内からもたくさん発見されていることがうかがえます。

当日は、豊橋市市制 100 周年を記念し、「恐竜と生命の大進化ー中国雲南 5 億年の旅ー」のタイトルで特別展も開催されていました。さまざまな年代の化石を産出し、生命史資料の発見の多い雲南をテーマに、当地の自然 民俗、発見された数々の化石を紹介していました。

特にカンブリア紀の化石については、カナダのバージェス動物群と近種のものが発見されていることから、その展示も力が入っていました。多くの化石のみならず、復元模型の多さで

も目を引きました。また、全長 17 メートルにも及ぶ竜脚類のユアンモサウルスの展示は、多くの来館者の注目を集めていました。

子ども向けのイベント 趣向も用意されており、デトロフオサウルスの横顔の小さなレリーフをゴム型と石膏でレプリカ製作するコーナーもありました。

ご案内いただいた長谷川道明学芸員からは、バックヤードの資料保存室においてもいろいろな解説をいただきました。特に、資料の種類ごとに湿度・温度に気を配らなくてはならない理想と、その理想状態に近づけるべく現状でできうる努力についての話題は興味深いものでした。長期に資料を保存する任務を負う博物館では収蔵庫もありますが、その施設を持ち合わせない準備段階では、資料の受け入れ時、その保存と整理方法において、いかに良好なコンディションを用意できるかも課題ではないか、とも考えました。

常に成長しつづける博物館としての姿勢、子どもたちを迎えるための趣向を考える姿勢、市民の憩いと娯楽性、参加することの楽しさも考慮した博物館として、豊橋市立自然史博物館の運営はおおいに参考になるものと思いました。

自然観察会の報告 安倍峠自然観察会

三宅 隆



紅葉の安倍峠



林道を降りて自然観察

11月5日、参加者30人で安倍峠の自然観察会を実施しました。JR静岡駅に8時に集合し、7台の車に分乗して、梅ヶ島温泉を經由して安倍峠へ向かいました。

実は、安倍峠に通じる林道は、土砂崩れの復旧工事のため、ここ数年間通行止めとなっており、今年10月にやっと復旧開通したばかりなのです。

当日は、天候にも恵まれ、紅葉真っ盛りの林道を登り、安倍峠手前の駐車場に車を置き、講師の杉野孝雄先生から、カエデやこの周辺の植物の説明を聞いた後、林道を歩き始めました。途中、フジアザミやリンドウ、イワシャジンなどの可憐な花を見ながら、又、色づいた様々な種類のカエデの葉の違いを勉強しながら、ゆっくりと自然観察をしました。

林道沿いで、時期はずれの鳥の囀りが聞こえました。なんと外来種のソウシチョウの声です。このソウシチョウ、原産地は中国ですが、飼鳥として輸入され、逃げ出した個体が増え、県内でも、富士山や天城山周辺などでは、日本の野鳥をしのぐほど増えており、ウグイスなどの国産種との競合が心配されています。

クマ出没注意の看板の所からサカサ川へ入り、川沿いの山道を、ゆっくりと歩きました。

安倍峠周辺は、オオイタヤメイゲツというカエデの大木の群落で有名なのですが、残念ながら紅葉はすでに終わっており、落葉してしま



杉野先生による植物の説明

た。

参加者の興味は様々で、色々なモミジの葉を拾って観察する人、双眼鏡で野鳥を探る人、動物の足跡や糞を調べる人、夕毛を使って水生昆虫を採る人、ハンマーで岩石を割って調べる人など多岐にわたっており、人間観察も結構楽しいものでした。

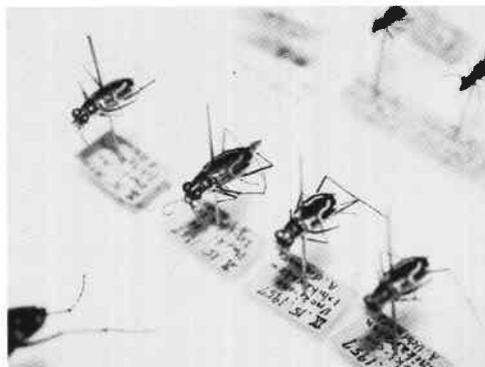
安倍峠下の小さな広場で昼食。付近はシカの採食跡や糞、足跡がいっぱいでした。昼食後さらに観察しながら林道を駐車場まで戻りました。途中でゴジュウカラ、エナガ、コガラなどの野鳥の群れが見られました。シカの群れを見た人もいました。午後は、やや薄曇となり少し寒くなりましたが、それでも全員無事に観察会を終りました。

北條善一氏の甲虫類標本

平井 克男



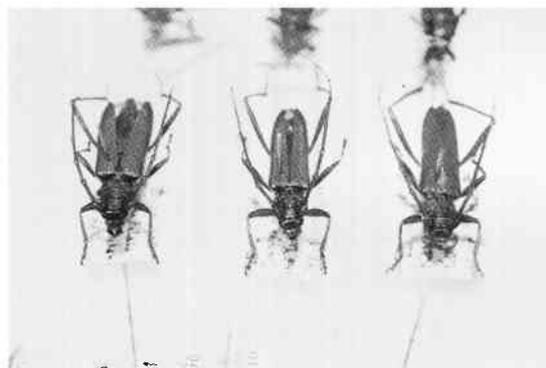
北條善一氏の甲虫標本



カワラハンミョウ



ムネアカセンチコガネ



アカアシオオアカミキリ

静岡昆虫同好会会員で主にチョウ類を採集し研究されている北條善一さんより、昨年お話を頂き、氏の所蔵されている昭和 20 年代後半の甲虫類の標本の整理、同定を行って来ました。

内訳を見ますと、ハンミョウ科 8 種、オサムシ科 21 種、コガネムシ科 47 種、タマムシ科 21 種、コメツキムシ科 45 種、カミキリムシ科 137 種、オトシブミ科 22 種、ゾウムシ科 55 種などを中心として総数 1,670 頭で大型ドイツ箱に 8 箱になりました。

北條さんの甲虫標本を拝見して、彼にお会いたした時、私は「昔あれだけ甲虫を採集されていたのに続けてやっていただければ……」と残念に思いお話をした次第です。彼の標本データの採集地から、実家のある東京都杉並区及び三鷹市、奥多摩など、群馬県谷川岳周辺、勤務地であった静岡県及び山梨県、長野県が活動の中心であったと思われます。

東京都及び周辺の標本については、現在宅地化、都市化が進んでしまっていることから貴重なものが多いと思われます。

彼の標本の中から貴重な種をリストアップしてみると、カワラハンミョウ、トウキョウヒメハンミョウ、ムネアカセンチコガネ、キンヘリタマムシ、チャイロホソヒラタカミキリ、アカアシオオアカミキリなどがあります。

北條さんは定年されても、なお昆虫に対する意欲衰えず、海外に旅行された折は観光だけでなく、これまでの昆虫の意識をもとに採集に励んでおられます。スペインやギリシャなどを訪れヨーロッパのチョウの採集をされています。9 月に静岡市内で行われた昆虫同好会談話会では、それらの標本を持ってきてくださいました。私は、それらを見せていただき新たな感動をいただいて感謝しております。



ライラックニシフボウソウ



アフリカ ケニアサファリ 三宅 隆

チーターの母子 (子どもは何とも頭)



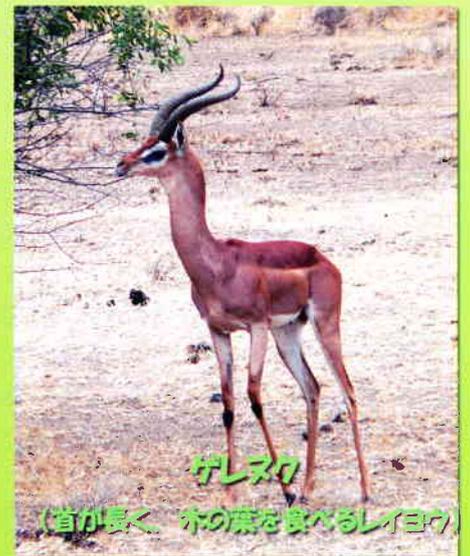
ヒョウ (まだ若いオスです)



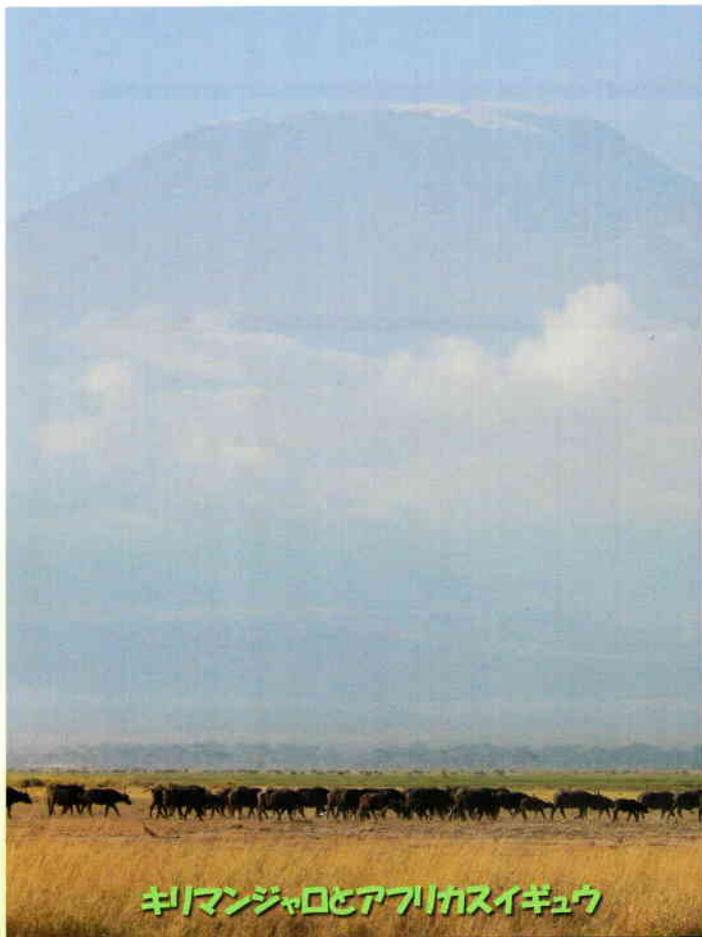
ライオンのハンティング (獲物はヌー)



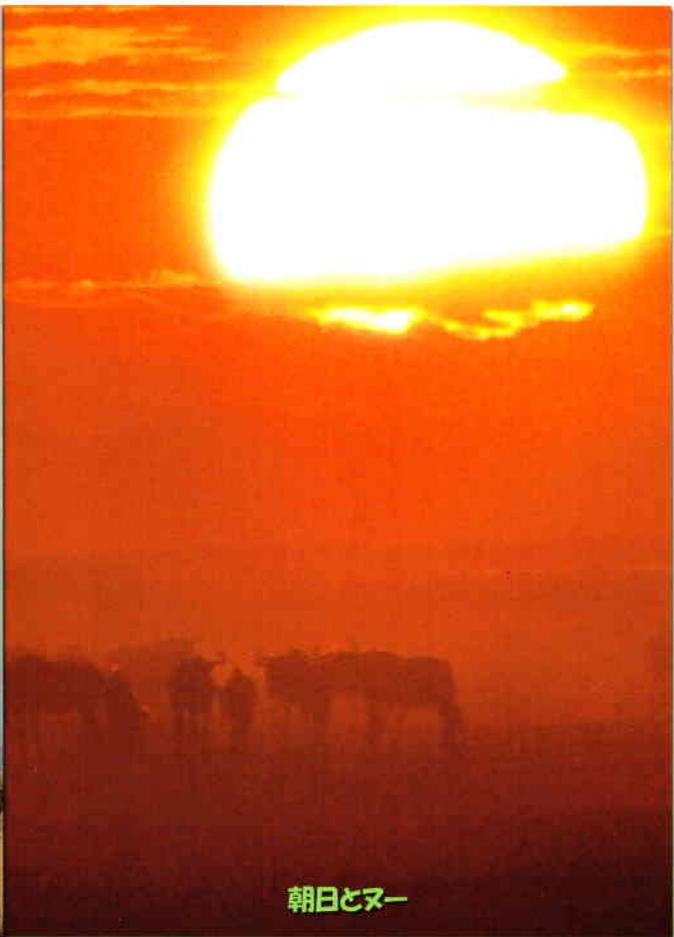
ヌーの河渡り



ガシヌク
(首が長く、木の葉を食べるレイヨウ)



キリマンジャロとアフリカスイギュウ



朝日とヌー

10月に、アフリカのケニアに行って来ました。10日間の短い旅行でしたが、朝から晩まで、自然と動物と野鳥三昧の生活で、久しぶりに命の洗濯をしてきました。

実は、ケニアへは1972年以来、34年ぶりの訪問です。以前の記憶は大分薄れているのですが、昔と違い、首都ナイロビでは高層建築が立ち並び、交通渋滞がひどくなっていました。ナショナルパーク内では、環境保護のため、道路以外の立ち入りが禁止されていました。動物たちは、密猟などにより減っているクロサイ、ヒョウなどがいる反面、ヌー、シマウマ、アフリカスイギュウ、イボイノシシなどの草食獣は以前に比べ、増えているように見え、しかも、人を恐れず、近くで見られるようになったように感じました。

ケニアでは、国策として自然と動物を観光の目玉としています。そのため、野生動物の狩猟は禁止され、売買も禁止されています。みやげ物屋から動物製品は一掃されています。パーク内のロッジやキャンプも設備が充実しており、快適な生活と食事ができました。

今回のこのサファリは、私の親しい動物写真家が主催しており、野鳥の会静岡支部のメンバー6名を含めて16人が参加しました。主としてマサイアンボセリ、ナクール、マサイマラの3ヶ所の国立公園を回りましたが、私の日ごろの行いが良いせいか、希望する動物たちは殆ど見ることが出来ました。特にライオンのハンティング、ヒョウ、チーターの親子、ヌーの川渡りなど、普通ではめつたに見ることができない動物たちも見られ、本当にラッキーでした。サファリ期間中、哺乳類は38種類、鳥類180種類位も確認できました。

本当に充実したサファリでしたが、いくつかの問題点も見受けられました。一つは、マサイ族の家畜の増加と野生動物との軋轢です。国立公園の中へも多くの家畜が入り込み、少雨のため乾燥した大地で、少なくなった草を食い尽くしています。さらに、ビニールごみも目立ちます。ケニアには焼却場が無いとのこと。黒や白のビニールが道路脇や、アカシアの木に鈴なりに引っかかっているのは異様な風景です。観光に力を入れるなら、これらの解決が望まれます。そして道路状況の悪さも問題です。幹線道路もいたるところ凸凹で、車での移動に時間がかかり苦痛でした。

写真は、デジカメで撮ってきました。沢山お見せしたいのですが、代表的な写真を載せます。

南アルプス深南部の一等三角点

奥石 邦昭

南アルプスは山梨県 長野県 静岡県にまたがる国立公園で、その北部は北岳 (3192m、日本第 2 位) を主峰とする鋸岳 (2685m) までを、また南部は赤石岳 (3120m、第 7 位) を主峰とする光岳 (2591m) までをいう。南アルプス深南部とは、光岳の南に広がる寸又川兩岸の原生林に覆われた山塊を指し、一等三角点はここに聳える黒法師岳 (2067m) と大無間山 (2329m) にある (図 1)。

黒法師岳へのルートは車で旧水窪町のクワフィル式水窪ダム堰堤を渡って 9km 先の戸中川林道ゲートから歩行約 6km で登山口に至る。太いコメツガが生える尾根を歩くこと約 3 時間で主稜線の分岐点に着く。途中、岩陰に咲くイワカガミ、コバイケイソウやシロヤシオの群落を見ることができる。分岐点では正面に前黒法師岳 (1943m)、左方に盆を伏せたような丸盆岳 (2096m)、右方に黒法師岳が眺められ、笹原の中を約 30 分で黒法師岳の山頂に着く。

この三角点標石 (図 2) は通常の十印に対して×印が刻まれているので、変種の一等三角点として知られている。頂上からの眺望は樹木に遮られてよくない。酸性雨や温暖化の影響なのか深山も大きく変貌しつつあり、9 年前より立ち枯木が目立って多くなった。帰路は水窪ダムに寄るのもよい。ダムの案内板には“基礎地質 砂岩、チャート”とあり、堰堤の中央部を光明断層 (西側はチャートなどの秩父帯、東側は砂泥岩互層の四万十帯) が南北に走っているようで、断層線はどのあたりを走っているのだろうか？

大無間山へは登山口である井川湖、田代の諏訪神社の鳥居から一泊二日のコースとなる。林が続く尾根を標高差 1100m、約 3 時間半登ると“P4”と称す五葉沢三等三角点 (1796m) に着く。近くに静岡市営小無間小屋 (無人) がある (ここには水場はない)。P4 と小無間山の間には、四万十層 (中生代後期) が侵食されて形成された鋸歯と言われる P3、P2、P1 のピークが見られる。鋸歯を通過して 300m 急登すれば小無



図 1 南アルプス深南部の一等三角点

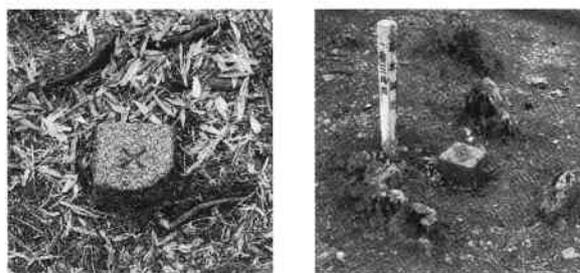


図 2 一等三角点標石：黒法師岳 (左)、大無間山 (右)

間山 (2150m) の山頂に出る。P4 からは 3 時間半の行程である。大無間山山頂へはここから倒木の多いシラビソとダケカンバの原生林の中を西南西に進み 2 時間半はかかる。山頂からの眺望は樹木に囲まれてよくないが、夜空を見上げれば、天の川をはじめこんなにも多かった

かと思われる星の輝きを楽しめる。翌朝、山頂から5分ほど下った展望地からの南アルプス南部や深南部の眺めが素晴らしい。

日本の一等三角点の最高地は赤石岳（長野県）であるが、県では大無間山である。

静岡県下の一等三角点を9回にわたって紹介してきたが、これをもって完結する。最後に、

静岡県内と周辺の一等三角点（▲：本点、△：補点（静岡県外は略））および武遠三角網（最初に測量された本点の骨組み）の一部を図3に示す。三方原基線（都田村と神ヶ谷の間）からどのようにして増辺していったかを読み取ることができる。

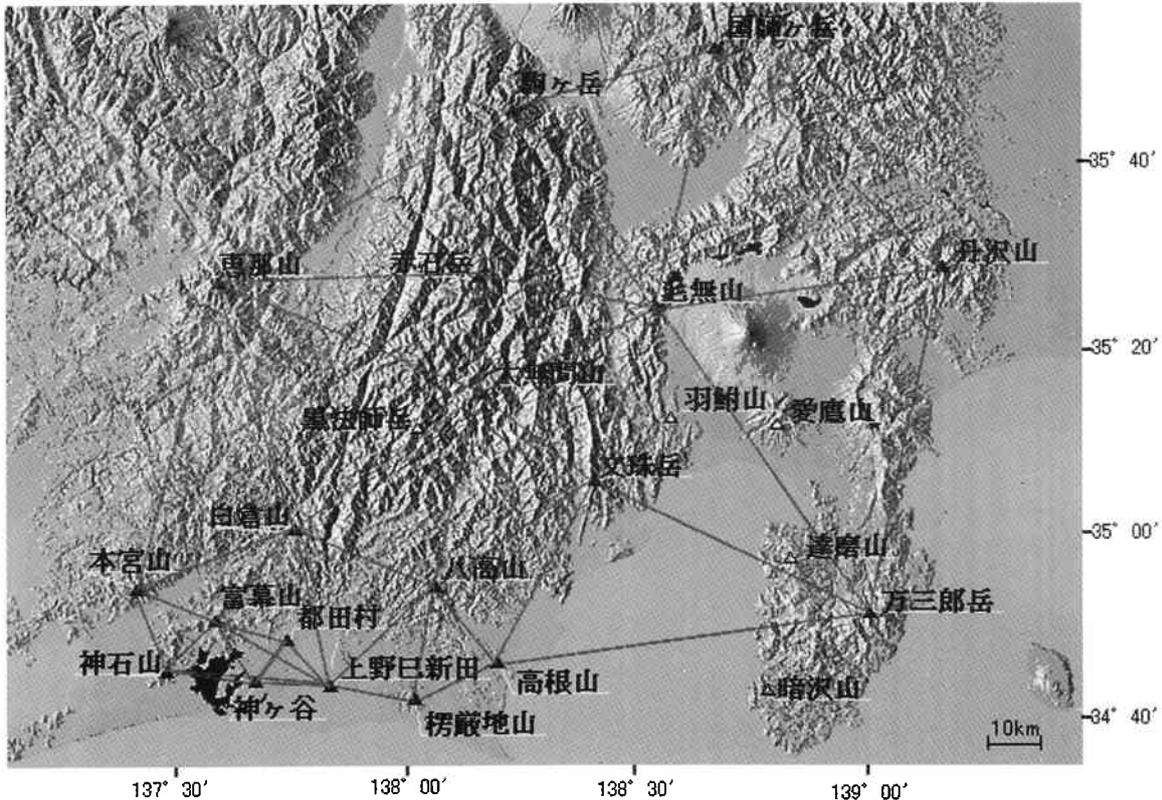


図3. 静岡県内と周辺の一等三角点（▲：本点、△：補点（静岡県外は略））および武遠三角網の一部

図書紹介

パンダの死体はよみがえる

遠藤 秀紀 著 ちくま新書 ¥735（税込）



国立科学博物館にいた遠藤さんの著書で、動物の死体の解剖と遺体（死体）を将来に残す重要性が語られている。

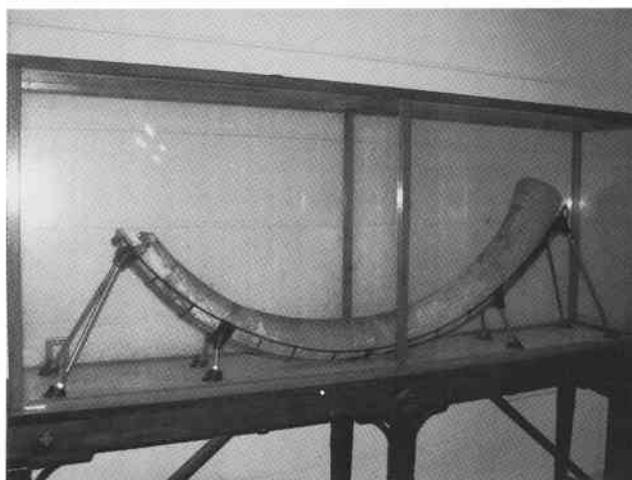
ゾウの巨体と取り組んだ解剖のようすや、パンダのもうひとつの「偽りの親指」の発見、レッサーパンダの「偽りの親指」、ツチブタの手の機能美など解剖学が明かす動物の体制系の機能の不思議が紹介されている。

本書は、筆者の主張する「遺体は全人類共有の財産である」という理念で貫かれていて、保存された遺体のいくつかについての標本としての意味や歴史的・社会的な重要性が示されている。また、遺体に興味をもたなくなった解剖学や標本を保存できない日本の大学や博物館に対して、筆者は痛烈に批判している。「本来博物館とは、例えば遺体を集め、例えば学術資料を収集し、そこから人類の新たな叡智を獲得していく、文化や学問や教育の根幹を支える組織であるはずだ。それがわが国では公共事業や政治や行政の体の良い道具に化している。それは貧しさ以外の何物でもないだろう。」と。

（柴 正博）

京都大学総合博物館見学記

佐々木 彰央



浜松で発見されたナウマンゾウの牙

2006年11月1日、京都はほのかに紅葉しはじめ、修学旅行生で混み合う市内を私はバスで30分かけ京都大学総合博物館へと向かいました。

展示フロアは広々とした設計になっており、海外遠征関連資料系、自然史系、技術史系、文化史系の4つのテーマにそって展示されています。入ってすぐに霊長類研究所の紹介と実験設備の説明があり、その奥には静岡県浜松市で発掘されたナウマン像の下顎が展示されていました。さらにその奥にはカモシカの全身骨格など、哺乳類の形態についての展示や昆虫類の標本、植物標本、熱帯雨林のジオラマなどが展示されていました。技術史系では機械の歴史が滑車を用いて紹介され、文化史系では縄文土器などが展示されていました。

次にスタッフの方に博物館研究室まで通していただき、博物館助手の本川さんと院生の方々にお会いしました。そこで、博物館の成り立ちについてお聞きしたので少し紹介しようと思います。京都大学総合博物館は2001年に開館しました。元々、京都大学の関連施設には動植物の標本から考古学資料まで、貴重な標本が多数分散され保管されていました。それを収集及びデータ整理し、今後の研究の進展と、学術標本の保全、生涯学習の支援を目的として創設されたのです。よって、幅広い分野の資料が集まっているため、自然史系の研究室だけでも



哺乳類の形態についての展示

魚類学の専門家から植物学の専門家まで幅広く在籍していました。よって、ただ保管展示するだけでなく研究活動を広い分野にわたって行っているのです。

一通り話を聞かせていただいた後、収蔵室を見学させていただきました。収蔵室がある廊下には「窒素ガス注意」と書かれた張り紙があり、本川さんが院生の方に「非常口分かるよね？」と聞きました。これには驚かされ、少しヒヤリとしました。窒素ガスは標本の劣化を防ぐために時折噴射するそうです。そして、その廊下を通り標本室の扉を開けると、目の前には鯨類の全身骨格標本が横たわっており、横の棚には大量の剥製と骨格標本が並んでいました。剥製は軟骨魚類のラブカとホホジロザメ、単孔類のカモノハシ、アマミノクロウサギなど数多くの標本が保管されていました。全身骨格標本はオオサンショウウオ、カエル類、ヘビ類、ウシ、エゾカワウソ、ウサギ類などが保管されていました。その殆どはかなりの年月が経っており、100年前の骨格標本が多数保管されていたのです。これらの標本は特別展示の時などに一般公開されるそうです。

今回、総合博物館の表側と裏側を見学させていただき、博物館が健全に機能するには標本が劣化することなく保存できる施設での収蔵。また来館者が学習しやすい展示方法及び館内設計。さらにスタッフが常日頃から学問を研究す

るという姿勢が必要だと感じました。

京都大学総合博物館の方々には貴重な標本を数多く見させていただき、感謝しています。



収蔵室の移動ラック



標本箱に入った動物標本

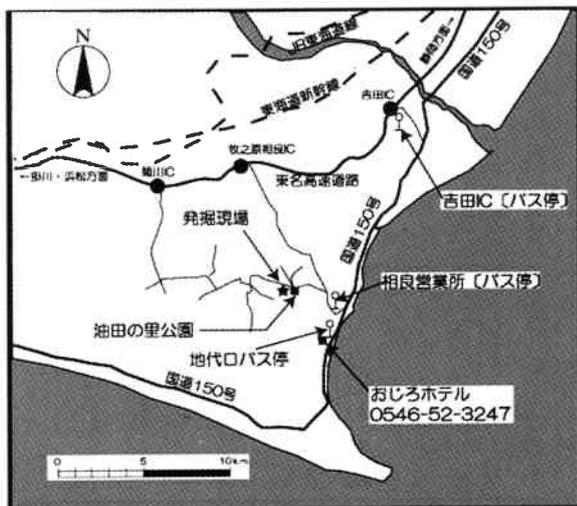


骨格や剥製標本



タンクに入った液浸標本

第3次ナウマンゾウ発掘調査地への案内



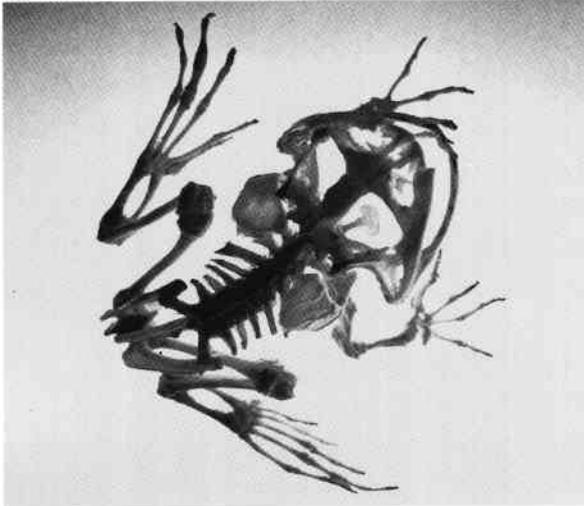
東名高速道路、菊川IC、相良牧之原ICまたは吉田ICを出て相良町方面に向かい、相良『油田の里公園』を目指して下さい。『油田の里公園』の駐車場に車を駐車して下さい。発掘現場は、駐車場から徒歩5分のところです。

バスの場合は、静岡駅北口静岡ターミナルホテル前〔11番乗り場〕より、静岡御前崎線にて、特急『御前崎サンホテル行き』、『町立浜岡病院行き』、『相良営業所行き』〔20分おきに出ている〕のいずれかに乗車し、『相良営業所』にて下車して下さい。乗車時間は、静岡-吉田間が約35分、吉田-相良営業所時間が30分です。

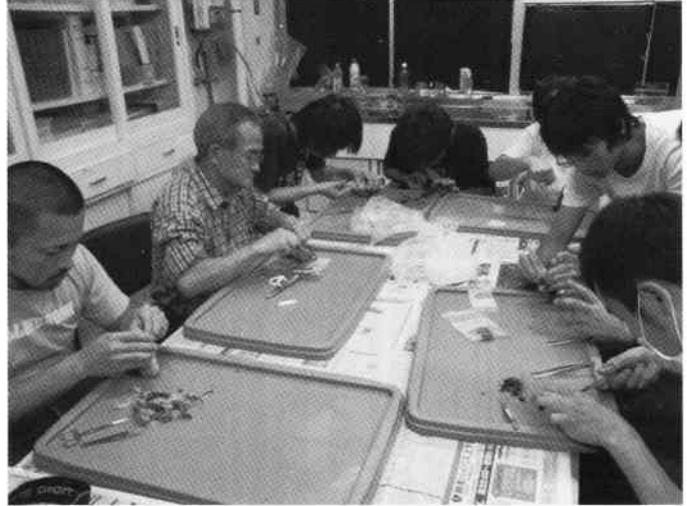
場所がわからない、またはまよわれた方は、『油田の里公園』（電話0548-87-2525）かまたは緊急連絡先にお電話ください。

動物骨格標本の新しい作製方法とその実習

横山 謙二



カエルの骨格標本



骨格製作実習で解剖しているようす

小型の動物の骨格標本作製するときには、標本を煮たり、肉を腐らせたり、またカツオブシムシに肉を食べてもらったりと、いろいろと手間がかかり、その割りに小さな骨がバラバラになり、骨格を組み立てることにとても苦労していました。

写真のカエルの骨格標本は、ここで紹介する方法で作製したものです。この方法はとても簡単で、さらに安価に、そしてきれいに骨格を組み立てることができます。この骨格標本作製法は、東海大学海洋学部海洋科学科2年生の佐々木彰央君が独自に編み出しました。詳しくは別の機会に佐々木君からしてもらいますが、今回はその方法の簡単な紹介と、10月に開催した骨格標本作製実習について報告します。

この方法は、まず動物の死骸から皮や肉を剥ぎとることから始まります。皮を剥ぎ取ったら、つぎに眼球を取り除き、骨に付着している肉と筋肉を取り除きます。おおかた取り除ける肉をとったら、第一頸椎と頭骨の隙間から虫ピンで脳をかきだし、肉と脳を取り除きます。関節部にまだ肉が残っている状態で、市販の食器漂白剤のワイドハイターを20～30%に薄めた水溶液に、死骸を浸します。1～3週間後、標本の動物によってさまざまですが、漬けばなしでなく、ときどき見て肉をとったりするとききれいな

標本ができます。

ワイドハイターで細かい肉が解け、まだ骨と骨がつながっている状態で、標本を水溶液から取り出します。取り出した標本を楊枝や針、櫛などで発泡スチロールの板に望みの姿勢にして固定します。標本は乾燥したら完成です。この方法では、溶けきらなかった骨についての最後の薄い肉が、乾燥することで接着剤の役割を果たして、骨がばらばらになりません。そのため、バラバラになった骨を後から部位をそろえて針金や接着剤などで骨をつなぐ必要がありません。

この骨格標本作製実習は、10月25日（水）の夕方に静岡県自然学習保存室で行いました。実習参加者は、おもに東海大学と静岡大学の学生とNPOの会員10名ほどで、講師は骨格標本作製法を編み出した佐々木彰央君にお願いしました。参加した学生たちの中には、ほとんど解剖をやったことがない学生もいましたが、大学では習うことのできない骨の勉強のために、熱心に取り組み、不器用ながらも何とか解剖していました。その晩のうちには、標本を解剖して肉をある程度取り去り、ワイドハイターの水溶液に漬けるところまでしかできませんでした。しかし、その後個人的に保存室に何度か来て、みんな標本を完成させることができました。